琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（県農業試験場名護支場果樹育種研究室）

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄農業研究会
	公開日: 2009-04-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017159

県農業試験場名護支場果樹育種研究室

本県の果樹生産はパインアップル、温州みかん等を主に行われているが、近年マンゴー等の熱帯果樹の生産が増加傾向にある。さらにパインアップルは昭和44年の10万トンをピークに減少傾向にあり、従来の加工用主体の生産から、生食用への転換も図らなければならなくなってきている。

本研究室は昭和62年に新設され、果樹関係の育種に関わる試験研究に携わってきた。平成元年には農林水産省のパインアップル育種指定試験地となり、国の試験研究事業と従来の県の試験研究事業とを合わせ持ち、研究職員4名と農業技術補佐員2名で試験研究に取り組んでいる。

パインアップル育種関係は、圃場面積3haで、パインアップルの交配育種と放射線育種を実施、生食用新品種の育成をめざしている。育種素材となる遺伝資源については、国内外より約100品種導入してきた。しかし、外国には本県に導入されていない遺伝資源が数多くあり、今後も導入が必要である。それら導入遺伝資源の評価により有望と見られる交配父母本を選定し、約4万の交配実生を育成、実生選抜を実施してきた。今後、さらに2～3回の系統選抜を実施して数系統に絞り込み、系統適応性検定試験、生産力検定試験、現地適用性試験等を経て増殖、農家への普及を計る予定である。

生食用パインアップルの育種目標としては、無刺で病害に強くて栽培しやすく、冬期でも高糖低酸性の周年供給型の品種育成をめざしている。パインアップルについては、現在、生食用食品の育成をめざしているが、将来にわたってはより広い用途の開発をめざし、観賞用パインの育成も考えている。

当研究室では、育種を効率的に実施するため育種技術の開発にも力を注いでいる。実生幼苗期の生育促進技術の開発により育種年限が短縮された。また、パインアップルの基礎的試験として、各種形質の遺伝様式の解明、自家不和合性機構の解明にも取り組んでいる。パインアップル葉縁の刺については、その遺伝様式が解明されつつある。パインアップルは増殖率が低いので、組織培養を利用した大量増殖法が試みられているが、培養に供する器官によっては変異が多く出現する。冠芽を利用すれば、変異は少ない。現在、より変異の少ないとされる苗条原基の安定的作出と、変異性の検定を実施している。

県の試験研究事業としては、カンキツの導入育種による品種選定、パパイヤ、マンゴーの放射線育種がある。パパイヤ、マンゴーについては低木性及び病害抵抗性品種の育成を目指している。カンキツについては、本県は露地条件では日本一早く温州ミカンが出荷できる地域として、極早生温州ミカンの各種系統が普及し

ている。そこで、極早生温州ミカンの品種選定に向けて試験を実施している。本県は亜熱帯地域に属し、中晩生カンキツの栽培には適していると考えられ、特にクリスマスから正月に向けての、有望な高品質果実として期待されている。また、現在の温州ミカンを中心とした、生産体制による労働の一極集中化を防ぎ、周年生産の中晩生カンキツを中心に、本県での適応性試験を実施し、本県気象条件に適した品質優良な中晩生カンキツの早期選定に努めている。　当研究室は、比較的新しい研究室で、まだ新品種の育成には至っていないがここ数年では、パインアップル、カンキツ等で新品種が育成あるいは選定できると考えている。

(池　宮　秀　和)